

3年生はハウセンカを育てて、からだのつくりや仲間の殖やし方の勉強をしています。花が咲き、実ができた状態ですが、ハウセンカの実に触ると割れて反り返る勢いで、タネを遠くに飛ばします。これは他の植物とは少し違った特徴ですね。



植物は仲間をたくさん殖やすためにいろいろ工夫して、より広い場所にタネをばらまこうとしています。

たとえば、

- タンポポの綿毛のように、風を利用して遠くまで飛んでいくタイプ。
- 水に浮くようなつくりになっていて、川や海の水に流されていくタイプ。
- 味美しい実をつけ、鳥などに食べてもらい、離れたところにフンと一緒に落とってもらうタイプ。
- 通称ヒツキボボ（正式名称：オナモミ）のように、動物の毛などにくっついて、遠くまで運んでもらうタイプ。
- アリに運んでもらうタイプ。（餌として巣穴に運んでもらい、食べられた後にゴミとして捨てられたところから発芽するタイプ）などです。

ところで、タネ自身にはどれぐらいの寿命があるのでしょうか？ 買ってきたタネでも時間が経つほど発芽率が落ちていきます。自然界であれば、翌年に発芽するのがふつうですが・・・。

1947年、東京大学検見川厚生農場から、3隻の丸木舟と6本の榎とハスの果托が発掘されました。このことから、その場所は縄文時代の船だまりであったと推測され、落合遺跡と呼ばれるようになりました。調査打ち切りの日の夕刻、女子中学生が地下約6mの泥炭層の中からハスの実を1粒見つけました。調査は延長されその後2粒の実が発見されました。3粒の実を、植物学者の大賀一郎博士が自宅で撒いて育てたところ、1粒が発芽し翌年にピンク色の大きなハスの花を咲かせました。この実の年代測定をしたところ、今から2,000年前の弥生時代のものであることがわかりました。



このハスは「大賀ハス」と名付けられ、米国のライフ誌にも世界最古の花として掲載されました。その後、大賀ハスは日本だけでなく世界各地で増やされています。

岐阜県にも大賀ハスを見ることができる場所があります。それは羽島市桑原町前野のかんぼの宿岐阜羽島の東隣にある「大賀ハス園」です。ちょうど今頃が花期なので、よかったですら保護者の方にたのんで、見に連れて行ってもらってください。

